

<書評>

『日本人に隠しておけない アメリカの崩壊』（ハート出版）

**2<sup>nd</sup> Civil War: The Battle for America**

**Max von Schuler**

マックス・フォン・シューラー

評者：タダシ・ハマ

米国人の行動方式を理解したいと思っている日本人は、日本人のコメンテーターの話聞くよりは、ネイティブの米国人から話を聞く方が賢明であろう。

日本人コメンテーターでも、ジャーナリズムの高い学位をとったり、あるいは、米国で米国の政府機関で働いた実績がある人がいるかも知れない。しかし、そのような人でも、平均的な米国人や公務員や知識人とそれほどの交際をしたことがあるとは言いにくいのが普通だと思われる。しかし、たいていの日本人にとっては、米国人の話を聞くというのは容易なことではない。英語のリスニングは、話すことと変わらないほどに難しいからである。さらに難しいのは、率直に自分の考えを述べてくれる米国人を見つけることである——つまり、「ポリティカル・コレクトニス」からすると間違っていることをそのまま述べてくれる米国人はなかなか見つからないものなのである。

実は、明白な真実をきちんと話してくれる米国人は極めて少ない。たとえば、「無制限に移民を受け入れれば、受け入れ国の文化を破壊することになる」、あるいは「ドナルド・トランプ大統領を徹底的に嫌悪している人々は、米国の文化を根本的に変革してしまいたいという傾向を持っている」などという真実である。さらに、「このようなりべらるな人々は、その信念をつらぬかんがため、もう一度アメリカに内戦を引き起す方向へ突き進んでいる」という事実になると、これを認めようとする人はいよいよ少なくなるだろう。

本書の著者マックス・フォン・シューラーは、日本に移住してからもう四十年以上になるが、最近の米国の事情についてもきちんと把握しており、それだけに米国の現状に非常な困惑を感じている。著者が思春期・青春期を過ごしたのは1960年代だったが、その時期に学校やマスメディアを含めた米国の体制が左翼のインテリたちにハイジャックされてしまった事実を回想し、さらに、彼らが現在なお米国の歴史を抹殺しようとしていることに憂慮を示している。

米国人でも保守層の中は、伝統的な米国がどんどん墮落しつつある現状を何とかしようと戦っている人が少なくない。フォン・シューラーは続ける。一方には伝統を愛する米国人がいて、一方には米国をラディカルに変革して、全体主義国家に変えてしまおうと企図している米国人がいる。この両極の間で、現在言論による戦争が継続しているのだが、これがやがて暴力を伴う戦いに発展するのではないかとフォン・シューラーは示唆する。日本も今のうちに備えをしておかなければ

れば、その戦いの余波を受けて、ダメージをこうむることになりかねない、とフォン・シューラーは述べる。

日本人、とくに若い世代は、米国文化を心の底まで受容してしまっている。しかし、それほど高く評価している文化を創出した米国民のことはほとんど理解していないように思われる。もし日本人が、今日の米国文化の基礎を形成した過去・現在の米国人の思考方式を十分には理解していれば、米国文化もしくは世界の他の文化を受容するに際して、多少は分別ある態度を取ることができるだろう。そこでフォン・シューラーは、米国と米国人について考える際にたいいていの人が見落としがちな問題点を指摘する。日本人も、隠された事実にまで目を向けられるようになれば、自国の文化をより評価できるようになるだろう。

民族の文化は歴史に根差している。しかるに米国では、多くの国民が、現代の「政治的に正しい」（ポリティカル・コレクトな）基準を適用して、自国の歴史を声高に否認し、代わって、まったく人為的な歴史を捏造しようとしている。それが、フォン・シューラーの指摘する所である。本書が挙げる好例がハリエット・タブマンである。解放奴隷だったタブマンは、奴隷たちを南部諸州から逃亡させるのに貢献した女性であるが、最近では、大統領よりも偉大な人物だと思われるようになってきている。彼女の同時代人には、エイブラハム・リンカン、ユリシーズ・S・グラント、ジェファソン・デビス、ロバート・E・リーなどがおり、こういう人々が、米国と南部連合の「歴史を作り」、「運命を決める」決定をしたのであるが、タブマンは彼らよりも高く評価されるようになってきている。

リンカンの場合は、南北戦争を指導したために、生命を失うことになった。それとは対照的に、タブマンは単に事実に対応しただけだった。彼女は高い身分を手に入れたが、何百万もの仲間たちと運命を共にしたわけではなかった。それにもかかわらず、「現在の米国の社会的風土の下では、学校の授業では、彼女のタイプの人々が圧倒的に『いい人』だと評価されることになっている」。学校の授業は別としても、左翼とラディカルな黒人たちは、歴史の改竄を図っている。南部は「悪」だったという理由で、南北戦争の南部側の著名な指導者たちの銅像を引き倒し、南部連合の旗を禁止しているのである。フォン・シューラーは、次に標的となるのは、ジョージ・ワシントンのような建国の父たちだと予測する。

「奴隷を所有していた」というのが口実になるだろうとのこと。フォン・シューラーは、現今の変貌しつつある状況を目して、「共産主義者の伝統的な手法は、歴史を書き直し、改定させるというやり方だ。そして、現在、マルクス主義者たちが米国で行っているのは、まさにそれなのだ」と述べる。そればかりでなく、熱狂的に歴史を破壊し、人為的な歴史に置き換えようという現在の偏執的な性向は、中国の毛沢東時代の「文化大革命」に酷似していると指摘する。

実際、そう言っても大過なかわらうと思われる。中国共産党の目的と米国の左翼の目的を比較し、その両者が目的達成のためならどんなことをも厭わないという事実を眺めてみるがよい。どこに違いがあるというのか。このような連中は、政治的に正しい（ポリティカル・コレクトな）歴史を信奉しているのだが、その目

的は何かというと、米国を完全に顛覆させることであり、つまりは「現在の米国社会を破壊」することなのである。

米国の歴史に関して、もう一つ指摘できるのは、第二次世界大戦とくに「太平洋戦争」については、ただ一つの史観だけしか受け入れられていないという事実を指摘することができる。つまり、それは、日本が悪で、米国は「自由と民主主義」のために、「正義の戦争」を行ったという史観である。いわゆる「慰安婦」の記念碑が米国中に増殖し始めた。これを見ると、米国人がどのようにして無批判に神話的な歴史を受け入れてしまったかがよく分かるのである。

実際、フォン・シューラーは、今となっては、米国人にこの神話とは違う史観を受け入れさせることはできないだろうと述べる。たとえ真実であっても受け入れは不可能である。米国人は、他の国々が「悪事を行っている」ことを見つけ出すことに熱中してしまったからである。その目的は、外国を貶めて、その分だけ米国の栄光を高めることなのだ。だからこそ、米国人は、日本軍の「慰安婦」について語るとき、米軍がどの国に駐屯しても必ず売春婦を利用したことに触れるのを避けるのであろう。そして、だからこそ、日本帝国の陸軍が虐殺を行ったことを非難するときには、米軍もまた捕虜や非戦闘員を殺害したという事実を無視するのであろう。<sup>1</sup>

現に、一般には言われていないが、フォン・シューラーが提起する問題は、米国が変革を行う場合には、暴力を用いるということである——「必ず、暴力と虐殺という手段に訴えるのである」。フォン・シューラーは、さらに続けて、大東亜戦争の原因は、米国が「日本の現状」を受け入れることができなかつたがゆえに、日本を強制的に「米国と同じような存在」に変えてやる必要があつたからだと述べる。このような言い方は穿ちすぎだという批判もあろう。大東亜戦争の隠れた原因はもっと単純明快なものであるはずだというのである。その場合には、たとえば、日米の経済摩擦とか、アジア・アフリカからヨーロッパの植民地主義を放逐したいという日本の願い、あるいは米国が自由主義的国際主義を口実にしたことなどが挙げられるのだらう。

しかし、それだけのことなら、何も日本に対してあれだけの焦土作戦を行い、民間人に対して核兵器を二度までも使用する必要はなかつただらう。また、それだけのことなら、米軍が占領を行い、何百年も続いてきた日本の伝統的国家体制を顛覆させ、正義の名も下にいわゆる戦争犯罪人を「平和に対する罪」の名で処刑する必要もなかつただらう。そもそも「平和に対する罪」とはまさにジョージ・オーウェル風の糾弾だ。

米国内でこんな文化の根幹を揺るがすような改革を行ったならば、伝統を愛する市民の反発は一通りのものではあるまい。米国が向かって行く方向に不安を感じて、ドナルド・トランプをホワイトハウスに送ったのは、まさしくこういう伝統を愛する市民だったのだ。最近、伝統を愛する市民と「マルクス主義者」との

---

<sup>1</sup>フォン・シューラー：『アメリカが隠しておきたい 日本の歴史』（ハート出版）（2015）

間で衝突があり、銃撃にまで至っていることを読者はご承知だろう。フォン・シューラーはこの事態に焦点を当てる。米国人は「自分自身と共存することができない」と言われる。したがって、妥協によって現在の対立に終止符が打たれるとか、また、トラブル対立が平和的に解消されるとはとうてい思われぬ。

すでに示唆したことであるが、米国が社会的経済的に崩壊したら、日本も無傷ではすむまい。そこでフォン・シューラーが警告するのは、第一には自衛隊を増強して、ロシアと提携せよということである。もう米国に保護を求めることはできないからである。第二には、農業を復活させよということである。これからは、米国に食料を依存することもできなくなるからである。

しかし、日本が何よりもまずしなければならないことは、米国人の思想に染まることがないように免疫力を高めることである。フォン・シューラーは、「哲学であれ、思想であれ、米国発祥のものはすべて素晴らしい、と信じている人が多すぎる」と慨嘆する。たとえば、左翼という連中は、日本人であれ、外人であれ、日本を非難する際には決まって、日本語を話せない移民を受け入れず、「多様性」を認めないのはおかしいと言いつける。<sup>2</sup>「多様性は『素晴らしい』ものだ」と左翼は言う。しかし、米国が多様性ある国になった結果、どのようなことになってしまったかは誰の目にも明らかである。移民の犯罪とテロが多発するようになった。移民は全面的に政府の補助金に依存する下層階級を形成するに至った。そして、都市部では、人種差別が日常茶飯事となってしまった。都市によっては、市民の大半が英語を使えないという所もある。

すでに米国では「多様性」がどのような結果を生むかが分かったのである。そうである以上、もはや、日本の左翼は、日本にも同じ結果が生じることを期待していると決めつけても間違いとは言えまい。日本が西欧流の「ヘイトスピーチ法」を制定したのは、その避けがたい結末だった。外国系住民がどんどん増えているからである。日本人および日本文化に根差した文化を発展させてゆかなければならぬはずなのに、日本のインテリは、「少数派」の権利を守り、反対意見を抹殺することの方が重要だと感じている。日本はまた西欧流のビジネスの習慣を受け入れた。個人の利益の方を国家利益に優先させ、一部では伝統的な終身雇用制を廃棄し始めている。米国の哲学や思想を取り込んでしまった国々は、米国が崩壊したら一蓮托生の運命を辿る外はない。

著者は米国でのマルクス主義者の陰謀に立ち向かう米国人である。日本人も、そういう人の著作を読めば、日本のマルクス主義者とその「進歩的なシンパ」が米国の場合と同じようなビジョンを抱いていることが分かるはずだ。それは、日本を新しい人民共和国へ変えようとする試みである。その人民共和国では、国民には捏造された歴史が押し付けられ、異なった意見は許されず、能力にも徳性にもかかわりなく、万人が平等だということになるのである。本書は日本人に対し

---

<sup>2</sup> それとは対照的に、中華人民共和国は「開かれた国境」を忌避する。そして、戦闘状態にある地域からの避難民を追い返す。 <https://thediplomat.com/2017/06/why-do-chinese-reject-middle-eastern-refugees/>; <https://www.nytimes.com/2017/02/23/world/asia/china-green-card-stephon-marbury.html>

て、日本的な思想と歴史に立ち戻り、日本的な道を模索するようにと訴えかける。さもないと、米国と同じ自殺への道を進むことになるかと警告しているのである。米国の将来を予測すると身の毛のよだつものがあるが、いずれにしても、これを日本の将来にする必要などないのである。